

ワタクシもカメでございます

平野 信輔

ワタクシもカメでございます。名前はサンキュッパでございます。
昨年、先住のニーキュッパがさんざんいろいろ喋っていったようですが、今年はワタクシがみなさまの前でご発言申し上げる榮に浴することとなりました。まことに感謝に堪えません。ニーキュッパの言い分だけお聞きいただいていると、奴はなかなかの賢者であるかのように聞こえるやもしれません。が、みなさま騙されてはなりません、奴は…失礼、彼は、実はかなりの乱暴者でございます。いじめっ子いじめられっ子で分ければ、間違いなく奴はいじめっ子、ワタクシはいじめられっ子でございます。話しっぷりからしても、奴の基本はである調でございます。礼儀をわきまえておりません。奴…いや失礼、彼は、日頃からこのような性格でございますので、人間のみなさんにも大変失礼申し上げたことと思います。成り代わりまして、お詫び申し上げます。
出自の違いでしょうか、ワタクシはどちらかというとおっとりしたところがございます。ニーキュッパはこの地へ連れてこられた子ガメの時分から相当にやんちゃな大食漢であり、憎らしいことになんの問題もなくすくすくと育ったようでございます。ワタクシの方はと申しますと、奴…失礼、彼よりも 1000 円ほど高い、正規価格で売りに出されておりました身でございましたが、恥ずかしながら売れ残りの最後の一匹でございました。今の主人に引き受けられなければそのままペットショップで短い一生を終えていたのかもしれない。と、申しますのも、実はペットショップに居た頃から、ワタクシはすでに栄養失調でございました。今は好き嫌いなくなんでもおいしくいただきますが、当時はカメ用の配合飼料がどうにも口に合わなかったこともございます、慣れない環境で食事ものどを通らず、弱って目も腫れ、甲羅に閉じこもってただ時の過ぎるにまかせておりました。悲しいかな、人間のみなさまは、やはり強いものを優先して選んでいくのでございます。同期の子ガメが次々と売

れていくのを横目で見ながら、ここで果てるのも致し方なしとそれなりの覚悟もしておりました。そんなワタクシを不憫に思ったのでしょうか、「このカメを」と店員にワタクシを所望した主人のその手には、緑色の小瓶が握られておりました。動物用のビタミン剤でございます。連れ帰ってからも一日二日は配合飼料に口をつけぬワタクシをただ様子見されていましたが、目の腫れがややひどくなるを見て取るや、これは致し方なしとワタクシの頭を押さえこみ、容器の先端で口をこじ開け、黄色いビタミン液を口からあふれるまで注ぎ込んだのでした。うわっと驚いて口を開けましたら、そのままのどの奥まで液が流れ込んで参りました。その荒っぽいことと云ったら、全く冗談じゃないぞ、コラ、殺す気かと…失礼、つい辛い記憶のせいで感情的になりました。ともかくもまあ、それが功を奏しまして、数日の内には少々元気が出て参りました。ある日、主人が思いつきに配合飼料の代わりにサラダ菜を置いてくれましたが、ようやくそれに食欲をそそられましてございます。やはり体調の悪い時には、のどを通るのは自然のものでございます。はぐっ、とひと噛みしたときの旨さといいましたら、それはもう言葉に表せません。それからはサラダ菜に配合飼料を少し足し、徐々に配合飼料の割合を増やし、とまあ、手間をかけていただいて、今は元気になりましてございます。こうして大事に大事に育てられましたので、少々引っ込み思案な性格と相成りましてございます。

先住のニーキュッパはワタクシよりも一回りおおきく、はじめから横暴でございました。身体の大きさにものをいわせてワタクシを押しのかたり乗り越えたり、サラダ菜も横取りする始末。咀嚼の速さもワタクシの五倍ほど。ワタクシがモシャッ、モシャッ、と読点を打ちながら味わっている横で、奴はモシャッモシャッモシャッモシャッと、そのせつかなこと、品格を少しも感じさせません。やはりバーゲン品なだけのことはございます、ワタクシのような正規価格品とは品の良さの点で比べるべくもございません。いえ、ワタクシはバーゲン品が悪いといっているわけではございません。バーゲン品であることをコンプレックスに感じながら、その品行を改めようとしないうその性格を卑しいと感じるので

ございます。いつも平和に食事をしているワタクシを大口を開けて脅し、時には足にかみついたりしてエサを横取りするような奴でございます。どうか、そんな奴の戯言に耳を貸すことのないよう、お願いを申し上げます。次第でござ…あいたたた、そんな、どすんって、やめ、うわあん…

どすんどすん。ふん、追い払ってやったわい。まったく何の戯れ言を言うのやら、お涙ちょうだいなどみっともない。バーゲン品コンプレックスなどと、勝手なことを。吾輩はそんなことを毛ほども気にしてなどおらぬ。ただ、ニーキュッパという名前が、吾輩が安物との誤解を招くのが気に入らぬだけである。だいたい主人はサンキュッパに甘い。邪魔をするからと吾輩を隔離し、奴にだけエサを与えようとすることもある。一度など、奴がエサを食べ終わるまで、仰向けにひっくり返されていたこともあった。右の前足をくいくい、左の前足をくいくい、勢いをつけて起き上がろうとするのだが、腹にちょいと指でも載せられれば、もうどうしようもない。当家において、一番のいじめっ子が主人であるのは間違いあるまい。まあ、吾輩たちの間でのいじめなど、実際いじめの内に入らん。吾輩にしてみればただの習性である。人の世間の大問題とは、その根本から違うのである。自分の生活空間へ侵入するものあらば、抵抗するのが生きものの常。悪気はないし、楽しみのためにやっているわけでもない。主人に至っては、毎月毎月、研究会とやらで、どこか西の遠い方へ何時間もかけてわざわざいじめられに行く。大変だ大変だといいながら、喜々として出かけていくのだから人間というのはわからない。世の中そんなものだから、サンキュッパの奴だって、吾輩がどすんどすんやらなくなれば、それはそれでさみしいに違いない。お、奴め、恨めしそうに遠くからこちらを見て居るな。

とにかく、サンキュッパは根性が足りない。確かに昔は吾輩の方が体が大きかったが、数年の間に追い越され、今となっては奴は吾輩より二回りは大きい。それでいて性格はあの通り子供時分のままであるから、情けない。自分が成長したという自覚など、まったく持ち合わせてはおらぬようだ。三つ子の魂百までというのは、こういうことか。同じもの

を同じように食って、奴だけでかくなるというのも、合点がいかなぬ。同属のリクガメではあったが種類は若干違っていたということか。いや待て、ひょっとすると主人が奴にだけ旨いエサを与えていたということがありはすまいか。…まあ、そんなことはどうでもいい。どうも人間と付き合うと疑い深くなる。大きさがどうあろうと、主導権は吾輩にある。初めて吾輩たちを見る客人は、ひるむことなく大きな相手にいうことを聞かせる吾輩を、さぞや痛快な心持ちで見るとは違いない。

誤解のないようにいっておくが、吾輩たちは決して仲が悪いわけではない。追い払ったりエサを横取りしたりはするが、夜は並んで寝たりもする。時には助け合うことだってある。以前、散歩中に植木鉢を乗り越えようと頑張っていたところ、勢い余っておととつとゴロンとひっくり返ってしまったのだが、じたばたしていたらサンキュッパが横から押しつけて、簡単に起き上がることができた。その親切なこと、腹を押さえて起き上がれなくして喜んでいる幼稚な主人とは雲泥の差である。吾等カメ属にとって、天地の逆転は正に生活を根底から覆されるような切迫感があるのだが、その不安を真に共有できるのはやはり同属なのである。ん？なにやらサンキュッパめ、こちらを見てニヤニヤしてるようだが…待てよ、ひょっとすると、日頃の腹いせにと突進して来たらたまたま上手い具合に…ということだったのか？まあよい、そうだとしても、聞いてみても本当のことは言わぬだろうから、確かめるすべはない。助かったには違いないのだから、好意と受け止めておいてやろう。いかんいかん、やはり疑い深くなっているようだ。

さて、今年の春はなぜだかすこぶる調子がいい。先頃冬眠から目覚めたばかりで、夜などかなり冷えることもあったが、昼の日差しを十分に浴びれば活力湧き出でる泉のごとし。主人からは「通常の三倍の速度で歩いている」という評価を頂戴した。「認めたくないものだな…走っているカメというものを」と、妙な台詞を言って一人悦に入っていたが、吾輩にはなんのことやらさっぱりわからぬ。とにもかくにも、今年の吾輩の散歩姿は正に彗星のごとし、これまでにない速さでベランダを右から左、左から右と駆け巡る。かたやサンキュッパはといえば、例年通りに

のそのそ、もぞもぞ、悠然と言えは聞こえがいいが、こういう奴が居るから吾等リクガメ属が愚鈍であるとの誤解を招くのだ。奴がきびきびと動くのは、吾輩から逃げる時のみ。それにしたって吾輩の速さから逃れられた試しはない。歩幅がある分、吾輩よりも速くてよさそうなものだが、まったく情けないことである。

少し心配なのは、カメキチ先輩であった。先輩はヌマガメであるので水の底で冬眠するのだが、いつもなら吾輩より早く目を覚まし、春まだ浅い内からぷかりぷかりやら日向ぼっこやらを決め込んでいる。それが今年はやや水から出てこなかった。一度天気の良い日に甲羅干しには出てきたものの、主人がエサをまいても食べに行かぬ。見れば、先輩の甲羅は一面が緑色の苔に覆われ、水も緑色に濁っている。冬場にここまでになるのは珍しい。冬眠疲れと相まって気力がそがれていたのだろう、主人がブラシで甲羅を磨き、水場もきれいに掃除したらようやく元気が戻って来た。吾等カメ属は、健康維持のためには日向ぼっこが必須である。苔むした甲羅では太陽の力が体内にまで届かなかったのである。その点、水に入らぬ吾等リクガメは気遣いがない。

さて、サンキュッパはやっつけた、先輩は元気になった、ということで機嫌良く散歩に戻る。ベランダを右から左、左から右、めまぐるしきことミズスマシのごとし。軽快な足音は近くのものに注意を喚起するに十分である。実際、ガラスの向こうから視線を感じる。主人かと思えばそうではない。つい先日連れてこられた新入りの猫である。右から左、左から右と、吾輩の動きをじっと目で追いつけている。すばしこく、体もぐにゃぐにゃで、吾等リクガメとは対極に位置する生きものと言っていい。生きものとしての種類がここまで違えば、互いに生活に干渉しないので却って共存がしやすい。食べ物、生活のペース、行動の時間帯、どれをとっても重なることがなく、互いを無視して生活が成り立つ。吾等が室内に入っても、今後この猫がベランダへ出てくることであっても、なんら問題は起きぬだろう。猫は好奇心の動物とやらで、吾輩にちょっかいを出すことはあるかもしれぬが、そんなときは向こうが飽きるまで甲羅に潜っていればよい。今のところ、吾輩のことが気にはなっている

ものの、距離が縮まるとおどおどと落ち着かない。どうやらサンキュッパ並み、あるいはそれ以上の腰抜けと見た。

この猫、行きつけのバイク屋の裏から拾われて来たらしい。どうせ、情けない声でも上げて、媚びを売っていたに違いなからう。サンキュッパにしろ、この雑種猫にしろ、たまたま主人の目に止まって温情で連れて来られたただけであって、吾輩のように飼うことを思い立ってわざわざ所望されたものではない。カメキチ先輩でさえ、主人の兄君が飼いきれなくなったのを引き取ったのであり、わざわざの所望ではない。求められてここに居るのは吾輩だけであり、やはり吾輩こそが主役にふさわしいのである。脇役が一匹増え、これからまた楽しくなりそうである。

(OSTEC講師)